

伝統工業が立地し、その奥に住宅地及び農耕地が広がっているという帯状構造が海により切断された圏構造一が認められ、又一方、常滑市周辺は衣浦湾地域よりもむしろ名古屋方面との関連が深く、衣浦湾の場合と同様、伊勢湾を中心とした圏構造の一部の軽工業・伝統工業地帯に属すると考えられる。又岬端部は中京地区のレクリエーション地区として圏構造の最も外郭にあると考えられる。以上のように本地域の地域構造は衣浦湾及び伊勢湾を中心とする二つの圏構造であると言える。

## 房総半島西南部の地理学的考察

遠藤規子

本論文では、一地域を地誌的にとり上げ、その地域性を明らかにすることを目的とした。主産業たる農業を中心に考察し、さらに農業を通して他産業、すなわち漁業及び近年海岸部の農村に大きな影響を及ぼしている観光業について述べた。

調査地域は、房総半島の西南部で、北部は鋸山、南部は館山平野に限られ、西部は東京湾に面している。地域の大半が丘陵地で、その中に小平地、小河谷が介在している。若い地質時代の隆起運動により数段の海岸段丘、河岸段丘の発達をみる。

第一次産業を主体とし、東京内湾にみられるような工業地域造成も行われず、また、都市化の波もまだ及ばない地域である。他の南房総地域の市町村同様、人口は漸次減少し、農家数も減少している。だが、離農による人口流出は顕著には起っていない。

農業からみれば、京浜に対する遠郊農業地域と言うことができる。地形の制約で、1戸当り平均耕地面積が、71.6 aと狭いので、小面積でも収益性の高い作目を取り入れている。専業経営は少く、2～3種類の作物を組み合わせて経営している。農業センサス旧大字別統計(S.40年)を使用して、作目の組み合わせから15地区に農業地域を分けることができた。地形及び気候条件が地域内で複雑に変化していることが、農業土地利用を変化に富ませている原因の一つであると考えられる。また、富浦のピワ栽培地では局地気候をうまく利用して農業が行われていることが、南無谷における日最低気温の観測結果からも明らかとなった。

観光業については、昔から地域の住民が宿を提供することによって観光地化の主體的推進者としての一翼を担ってきた。海水浴場地という季節的な観光地であるので、農家、漁家の兼業として民宿が行われている。民宿は夏季だけで相当まとまった現金収入が得られるので、兼業としては割の良いものである。海水浴客の増加にともなって、民宿は海岸部ほぼ全域にわたり行われており、海岸地域の農業や生活に様々な影響を及ぼしている。内陸部には、たいした観光資源がないこと、海に近いということが民宿業を発展せしめた一大原因であること、ここ2～3年日帰り客が増えつつあることなどからして、民宿が内陸部までひろがっていくことはあまり考えられない。

次に、漁業は本地域においては、外房地域と比較するとさかんではなく、小規模な沿岸漁業が大半を

占めている。小規模漁家は遊漁案内や民宿へ力を注ぐ傾向にある。

以上、本地域は、海岸部の漁業及び観光業を兼業とする海岸部農村と、内陸部の純農村に分けられる。農業地域は作物の組み合わせからさらに細分化される。

## 熱海市の地域構造

越智敬子

観光と地域の結びつきに興味をもち、熱海市を選んで、観光都市の成立過程と地域構造を考察した。

### 論文構成

#### I 章 地域の概観

#### II 章 温泉観光業の発達

#### III 章 市街地の構造

#### IV 章 結語

論文の順序に従って要約すると次のようになる。

熱海市は、東京と時間距離最低1時間の近距離に位置し、豊富な温泉と温和な気候を基盤にして、平坦地の狭小な地域に温泉観光業のみが発達してきた。土地利用・人口・産業について概観すると、耕地率10%弱と低く、人口密度は温泉街に集中して高く、女子人口が半数以上を占め、サービス業就業率50%を越えて観光都市の性格を示している。

温泉観光地の発達過程は、湯治場→休養地→遊覧地→観光都市の4段階に区分されるが、熱海は、明治以来日本最大の温泉地として発達し今日最も進んだ観光都市段階に至っている。つまり、旅館の巨大化、観光市場の拡大、季節変動の通年化につれて、関連観光産業の展開、観光ルート上の宿泊拠点、遊興地性格の増大が現われている。

発達要因は、明治以後の発達過程と地域の変遷から推論すると、東京との近接性と温泉を基盤にして、交通条件を整えながら、積極的な観光資本を投下してきたことにある。観光資本は、時代が進むにつれて巨大になり、特に、昭和30年以降の観光ブームの中で、中央資本は、ホテル・遊園地・交通の乗り入れなど積極的に観光開発に進出している。それゆえ熱海市の市街地も、明治初期の源泉周辺から現在は駅周辺の発達を経て、山地斜面、及び海岸に伸びている。

地域構造については、以上の発達過程の一時期として現在の熱海地区をとり上げて考察した。

観光産業事業所の分布から、市街地は大きく二地域に分かれる。旅館業を中核にして関連サービス業・娯楽業が混在する高度50m以下の地域(A)と、50~150mの住宅+寮の地域(B)で、(B)の外側には、山林、原野を開墾した新しい住宅団地を含む地域(C)がとりまく。(A)と(B)は、人口密度が高く(A)地区には、商店街・旅館街・歓楽街が集積し、駅前から糸川河口にかけて、都市の中心地帯を形成している。細かい地域区分は指標がなく把握できないが、発達過程から部分的な説明は可能である。